

『きみは過激なエピキュリアン』

著: 春原いずみ

ill: 鶴

「今……何時だ？」

「六時過ぎ。僕だったら、起きる時間」

けだるい声が聞こえた。シルエットだけの彼は、手にしたカップからコーヒーと思われるものを飲んでた。たぶん、コーヒーメーカーか何かでいれているのだろう。香ばしいいい香りがしている。

「俺も起き……え……っ」

そのときになって、瀬川は初めて自分の状況に気がついた。

瀬川が寝ていたのは、たぶんダブル以上と思われる広いベッドだった。そこにたったひとり、裸で寝ていたのだ。

「……服と下着は一応まとめてあるよ。新品あるから貸したげてもいいけど、僕とは趣味が違うみたいだしねえ」

また怠(だる)そうな声。シルエットはもの慣れた仕草でソファにもたれかかっている。イージーパンツの片足を床に下ろし、もう片足はソファの上ののせて、自(じ)堕(だ)落(らく)に背もたれに身体を預けている。イージーパンツの上は Cotton の白いシャツを羽織っているだけで、ボタンはすべて外されていた。滑らかな胸がかいま見えて、思わず瀬川は目をそらしてしまう。

顔が見えない。顔だけが逆光に遮られて、見えない。

「……ここは……」

「覚えてないの？」

少し非難めいた言葉に、瀬川は渋々うなづく。

どうやらここは、誰かのマンションであるらしい。瀬川のマンションより数段家賃は高いだろう。広さも天井の高さも全くグレードが違う。

「失礼しちゃうなあ」

すうっとシルエットが動いた。白い顔が現れる。

「瀬川せんせ」

“……っ”

その美しく整った、端(たん)麗(れい)としか形容のしようのない顔を見て、瀬川は悲鳴を飲み込んだ。

「多岐……先生……」

「はあい」

少しずつ記憶が戻ってきた。

“昨夜……こいつと飲んで……背負って帰るって……”

つまり、ここは多岐の自宅なのだろう。文字通り、彼は瀬川を背負って、家に帰ったというわけだ。

しかし、いかに広いといっても、独身の男がひとりで住むマンションだ。ベッドルームがふたつあることもないだろう。ということは、このベッドで、瀬川と多岐は同(どう)衾

(きん)したことになる。

“うわあ……っ”

その上、なぜか自分は全裸で、多岐もかなりしどけない姿をしている。これは……。

「あの……さ……」

瀬川は毛布を思わず引き上げながら、恐る恐る言った。

「俺……何かした……？」

「え？」

蚊(か)の鳴くような瀬川の声に、怠そうにコーヒーを飲んでいた多岐が顔を上げた。大きなアンバーの瞳がきょとんと見開かれている。

「何かって……」

「いや、だから……」

瀬川は落ち着きなく周囲を見回す。

ページとブラウンで統一された、落ち着いた部屋だった。ベッドの乱れと間抜けな裸の男さえいなければ、まるでモデルルームのようだ。見事なまでに生活感ゼロである。

「何かって言えば、何かだろうが……っ」

半ばやけくそになって喚(わめ)いた瞬間、凄まじい頭痛が襲ってくる。

「いててて……」

「……痛って言いたいのは、こっちなんだけど」

多岐がごく落ち着いた声で言った。

「……あんまり無茶しないでほしいなあ。僕、これから日勤出て、当直入りなんだから。多少の運動不足は認めるけど、力任せはいただけないよう」

「え……」

のほほんと言われたセリフに、頭の中が真っ白になった。

“お、おい……っ、マ、マジかよ……っ”

瀬川はごく健康な成人男子である。人並みに恋愛経験もあるし、それに付随する行為の経験もある。その上彼の職業は、いまだに合コンの相手として、見合いの相手として不動の人気ナンバーワンである医師だ。行きずりに近いつまみ食いの経験もないとは言わない。いや、たっぷりある。お持ち帰りもありだ。

“わ、わからねえっ”

しかし、その瀬川をしても、今の自分の状況が全く理解できなかった。

「俺……さ」

ようやく視界の隅に、多岐が揃えてくれたという自分の衣服を見つけ、瀬川は少々情けない格好でずるとベッドから降り、ごそごそと身支度を始めた。

「昨夜のこと……全然覚えてないんだけど……」

「あ、らら……」

しどろもどろな瀬川言葉に、多岐はソファに座り直し、カップを手にしたまま、すつと足を組んだ。

「あれだけ無茶しといて、忘れる？ おかげでこっちは身体がたがたなのになあ」

くしゃくしゃのシャツを羽織りかけた瀬川の手が止まった。恐る恐る振り返る。

「……一応確認するけど……」

「はい？」

言われてみれば、多岐の完(かん)璧(べき)に整った顔にはうっすらと疲れが残っている。薄青い血の澱(おり)がベールのように美貌を覆(おお)い、壮絶に色っぽい。

「俺……あんた相手にできたわけ？」

“何言ってるんだあっ！”

自分にツッコミを入れてももう遅い。ぴたりと多岐の表情が固まり、次の瞬間美貌をぶっ壊す勢いで笑い出した。

「な……何言ってるんだか……っ」

まさに爆笑である。ソファに倒れ、肩をふるわせて笑っている。

「そ……そんなの僕に聞かないでよ……。自分の身体に聞いてみってくれる？」

思わず自分の下半身を見下ろして、瀬川ははっと我に返る。まともに多岐と目が合い、また多岐は笑い出した。

「せ……瀬川せんせって……おもしろすぎる……」

「……帰るっ」

本文 p77～82 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>